

# 藝文だより

第39号

令和4年3月15日  
村山市芸術文化協議会  
題字/齋藤 湖舟



組踊の人気演目「執心鐘入」

## 沖繩の伝統芸能 組踊特別鑑賞会

十月三十一日、沖縄県の伝統芸能である組踊（くみおどり）の特別鑑賞会が市民会館大ホールを会場に開催されました。この鑑賞会は文化庁の重要無形文化財等公開事業の一環として、沖縄県教育委員会などが主催して全国各地で実施しているもの。組踊は今から約三百年前、沖縄がまだ琉球国だった時代に成立した伝統的な歌舞劇であり、国指定重要無形文化財・ユネスコ無形文化遺産となっています。第一部では同じく国の重要無形文化財に指定されている琉球舞踊が披露され、祝賀の歌舞として演じられる老人踊

を皮切りに、若衆踊・二才踊・女踊の四種類が演じられました。第二部の演目は組踊の人気演目である執心鐘入（しゅうしんかねいり）。歌舞伎や人形浄瑠璃の演目にもなっている安珍・清姫伝説を題材とした物語を、立方と呼ばれる演者たちが洗練された所作で表現しました。

第一部・第二部ともに地謡（じうてえ）と呼ばれる伴奏者による歌や三線・太鼓などの音楽が奏でられ、琉球の雰囲気

に包まれた会場からは、脈々と受け継がれてきた伝統芸能への感嘆と称賛の拍手が惜しみなく送られました。



祝賀の舞い「琉球舞踊」



地謡による琉球古典音楽

## 芸術文化の力を 存分に発揮した芸術祭



村山市芸術文化協議会

会長 伊藤 大蔵

令和三年の漢字は「金」に決まりました。東京五輪でブルガリアの妖精達が新体操で大活躍し、団体で金メダルを取ったことは市民として歓喜と感動に包まれた素晴らしい快挙でした。反面、私たちはパンデミックの渦中におり、新たにオミクロン株が広まっています。今回のコロナ禍は、我々人間に自然界の持つ脅威を見せつけました。これまでも、天然痘・ペスト・結核・インフルエンザなど感染症との闘いが人類の歴史であると言われてきましたが、これほどまでに我々の日常生活に影響があるとは想像を遙かに超えていました。

令和二年春から軒並み芸術文化活動を休止せざるを得ない状況に、改めて「芸術文化活動の意義」について考えてみました。数か月の休止期間を経てようやく活動が再開したときは、上手下手などは関係なく、活動できるように

なった喜びが大きかったように思います。つまり、芸術文化の力というのは、人に感動や生きる喜びをもたらし、人生を豊かにすることです。心の栄養、ゆとり、人間関係の調和なども、より一層育まれるのではないかと再認識したところです。

第五十七回村山市芸術祭は、どの催しも感染予防対策をきちんと行い、内容の濃い素晴らしい展示、演奏会、公演でした。特に、村山混声合唱団フェブリエの三十回記念演奏会、村山エッセイクラブの同人誌『雑木林』二十五周年記念号の発刊は、節目の特筆すべきものでした。様々な工夫を加えながら今回参加していただいた各団体の皆様とご来場いただいたお客様に改めて感謝を申し上げます。今後とも、故郷の将来を担う子供たちのために、地道に芸術文化の活動を続けていきたいと思います。

## 創立二十五周年を迎えて

村山エッセイクラブ 倉金徳嗣

我が村山エッセイクラブにとつては創立二十五周年を迎える節目の年である。

当クラブは平成七年四月二十九日に東沢公園の「湖心亭」で大戸忠吾氏を中心に旗揚げされた。

その時参加した伊藤カツ子さんは「小学校以来、綴り方を書くのは初めてだ」と言っていた。

当時のメンバーも退会して世代交代が進み、いろいろ紆余曲折もあった。ただ言えることは、当クラブの仲間が「書くことが好きだ」から参加している。

日頃思っていることを自分の頭で考え、書き表すことは、何にも変えられない喜びである。

当クラブでは二か月に一回の例会がある。締切日が近づくと、〈何をテーマにして〉と毎日悩んでしまう。

あれこれ、さんざん迷って締切日の前の晩に決心して、「まあ、これにするか」と。皆さんの前に出す原稿なのに、十分に練り上げないまま

提出することがある。

するとさあ大変。皆さんの前で朗読をし、批評を受ける。当然、辛口の鋭い指摘を受ける。額や脇の下は汗びっしょり。

こんな苦しい思いをしても、刷り上がった『雑木林』のインクの臭いを嗅ぐと、全ての苦勞が吹き飛んでいく。

刊行する『雑木林』はエッセイだけでなく、俳句、短歌、紀行文、小説となんでもありで、読んでいても飽きることはないと言われる。

『雑木林』二十五周年号はコロナ禍による活動停止があり、発刊に苦勞した。

節目に当たる年であったので、「ふるさとの行事」というテーマを設けた。

誰にでもふるさとがあり、楽しかった行事があったらう。高齢化が進み、そのような行事の思い出がだんだん風化してしま

うのでは。ここで私たちの記憶を書き止めなければとの思いで。

『雑木林』という名前は、杉や松のような立派な材料になる木ではない。裏山に生えている名もない薪にしかならないつまらない木だ。しかし切られてもしぶとくまた生えてくる強い木でもある。また〈雑〉とは、いろいろなという意味である。我が機関誌『雑木材』の名前は、とてもうまく考えられているものだと感心している。

この頃、危機を感じていることがある。それはクラブ員の高齢化、すなわち人員の減少である。これぞと思う方に声を掛ける。「イヤー、頭は揺れるが作文はどうも」と断られる。

我がエッセイクラブは別に老人クラブではない。我こそと思われる方は名乗り出よ。



25年の歴史を綴る



# 歌えたことに感謝して

村山混声合唱団フェブリエ 小山孝子

オープニングを告げるオルゴール音が大ホールに響き渡りました。客席の灯りが暗くなり、村山混声合唱団フェブリエの第三十回記念、プロムナードコンサートがいよいよ開幕です。

この日をどれほど待ったことでしょうか。降り注ぐ照明の暖かさがとても心地よく、二年ぶりに、随分久しぶりのような感覚に懐かしささえ覚えました。

二年前の十一月、二十九回目のコンサートを無事に終えた私たちは、迷うことなく、来たる三十回目のコンサートをメモリアルなステージにするために、すぐに選曲に取りかかりました。

ところが、翌年一月に新型コロナウイルスが発生、世界中を震撼させたのです。二月にはすでに猛威を振るい始め、他県ではあったものの、複数の合唱団からクラスターが出ました。世の中は、合唱はコロナ感染の根源と言わんばかりでした。肩身の狭い思いを強いられる状況になり、学校

など教育の現場からも歌が消えました。命をも奪いかねない、目に見えないウイルスへの恐怖から、とうとう練習を休止することになったのです。

四、五、六、七月と、練習自粛は続きました。頭の中を様々な思いが巡ります。「安心して歌える日が来るまで待とう」「いつまでも立ち止まったままでいいのか」「できる限りの対策をすれば、練習はできるのではないか?」

そんな葛藤の毎日でした。最も簡単なのはやめることでした。でも私たちは、「歌う!」という選択をしたのです。

七月末から短時間練習を開始し、一か月後には通常練習に戻りました。これまでと違うところは、検温と体調のチェック、消毒、換気、練習時のソーシャルディスタンス。そして何より、マスクをして歌わなければならないところ

です。マスクの製作には、演出部員がすぐに動き出し、試行錯誤を重ね、合唱用マスクが完成しました。コロナが収束することを期待しつつ、毎



【メサイア】管弦合奏団と共に

から歌いたい曲のアンケートをとるなど、例年に増して、団員の想いがいっぱい詰まったコンサートです。

第一ステージは、メモリアルコンサートを華やかに飾る、ヘンデルのメサイア。しかもフェブリエ管弦合奏団の演奏で歌います。

第二ステージは、こんな時代だからこそ、みんなで元気になろうと、誰もがご存知の中島みゆき曲集にしました。第三ステージは、組曲の中でも最も代表的な「水のいのち」です。雨粒が落ち、川に注がれ、やがては大海へと流れゆく。海の水は再び雲となり、また雨を降らせる――。

繰り返される水の自然を歌った壮大な曲です。上手から管弦合奏団が、下手より常任指揮者の菅野年央先生が登場すると、客席から大きな拍手が湧き上がりました。

目標が立たないまま、二年間ずっと歌い続けてきました。そして、今までにない不安を抱えたコロナ禍でのコンサートでしたが、それだけにとっても楽しみで、なぜか心が弾みました。歌えることがこんなにも嬉しくて、普通がどんなに幸せかを身に沁みながら、

心を含めて歌っていました。全ステージを歌い上げ、割れんばかりの拍手とアンコールをいただきました。この日を共に待ちわびていてくださったお客様にもとても喜んでいただきましたが、私たちがその何倍も嬉しく、感謝の気持ちで胸が熱くなりました。

来年度にはコロナが収束し、いつものコンサートに戻ってほしいと思います。でも、仮にコロナ禍が続いていたとしても、フェブリエのガイドラインを基に、緩みのない感染対策で喜んでいただけるコンサートを開催したいと思えます。今度は、満席のお客様をお迎えして。



30周年を盛大に飾る



# 第57回村山市芸術祭

会期 令和三年十月十五日〜十二月五日



和の音色を奏でた三曲公演



会場と一体になった津軽三味線・民謡・舞踊フェスティバル



個性の光る書の色紙展



甘い香りに包まれた五流派合同のいけばな展



感動を呼んだ劇団赤ひげ『STRAW HATS』



立派な枝ぶりのさつき盆栽展



# 芸術祭 57th



恒例となった厚岸との合同写真展



美しい音色を披露した大正琴演奏会



温かい作品が集まった手芸作品展



大作から小品まで並んだ美術展



ハーモニーが響いた北村山吹奏楽団「秋のコンサート」



# 書道会の活動

村山市書道会 青柳春城



秀逸な作品が展示された書道展

村山市書道会です。各流派の特徴や個々のユニークな特色を持った書体の会員四十三名で活動しております。多くの会員は、日展を始めとする全国規模の公募展や県総合書道展、各社中展などに出品し、日々腕を磨いております。会としての主な活動は、六月に東沢公園で開催する「筆供養」と、村山市芸術祭の期間中に市民会館で開催する「書道展」「書の色紙展・子ども書の色紙展」です。そして新たな活動として、市内小学校での「書写」の授業への指導協力を始めました。会員が学校に訪問し、主に初めて

筆を持つ三年生の授業のお手伝いをさせていただいています。

今年度は、新型コロナウイルスの感染防止対策を施しながら、二年ぶりに書道展と色紙展を開催することができました。今回の芸術祭では、書道・美術・華道・写真の展示四団体が日程や会場を調整した上で合同展という形で各々の展示を開催し、書道展は村山フォトクラブの写真展と同じ日程で行うことができました。一度の二種類の作品展を楽しめるということで、例年より賑やかで華やかな会場となりました。

書道展・色紙展共にご家族でお越しいただいた方など、多くの皆様よりご覧いただき感謝申し上げます。ありがとうございました。

筆供養・書道展・色紙展、どなた様も参加できますので、お近くの会員に気軽にお声掛けください。また、書道会の会員募集や書道教室の生徒募集も常に行っておりますので、宜しくお願いいたします。

# 今こそ、夢と希望を届けたい

松舞踊村山塾 田中正信



歓声が溢れた股旅舞踊

夢と希望を贈りたい

コロナウイルスの蔓延によって、大変な脅威に晒されています。そして、私たちの心は折れそうになってしまいました。しかし、人は辛いとき・苦しいときでも、音楽や舞踊によって心は癒され、夢と希望が湧いてまいります。

松舞踊は、そんな辛い・苦しい時代だからこそ、皆様に「夢と希望をお届けしたい」

# ドン！ドン！ドコドコ！

杉島諏訪太鼓保存会 早坂修

コロナ禍で密集が避けられ多くのイベントが中止に。披露の場が無くなり、早二年が経とうとしています。一時的に感染者数が落ち着き、規制が徐々に緩和され始めた頃、十一月七日に開催された「津軽三味線・民謡・舞踊フェスティバル」にて、本当に久しぶりの太鼓演奏の機会を頂くことが出来ました。

その微かな音は曲の進行とともに強さを増して行き、山場では打ち手が渾身の力で立ち向かう。体の奥底の熱いものが声となってあふれ出る。息を弾ませ、顔面に大粒の汗を浮かべながら「これが和太鼓なんだ」と強く実感しました。その大きな音から、神事に用いられることもある和太鼓。日本において太鼓の音は異界にも届くものと考えられています。



会場を震わせた杉島諏訪太鼓

るそうです。私たちの打つ太鼓の音が響き渡るように、そしてコロナを跳ね返す世の中が来ることを願って、精一杯打ち込んで参ります。

「芸術文化の灯をともし続けたい」そんな熱い思いで発表会を開催しました。練習の成果を発表したい。私たちの先生は、松流松舞踊宗師・松としはる先生、同家元・松ゆうか先生です。練習の成果を発表し、芸術の秋に相応しい素晴らしい発表会を目指しました。観客と踊り手の息がピッタリ 股旅舞踊の魅力……それは昔懐かしい義理と人情の世界です。市民会館大ホールは、熱気と興奮に包まれました。観客と踊り手の息がピッタリ、「勇気と希望をいただきたい」などの言葉をいただきました。





# 全日本合唱コンクール全国大会 『金賞』

令和三年十一月六日、埼玉県所沢市民文化センターミュージックホールで行われた、第七十四回全日本合唱コンクール全国大会（小学校部門）で、楯岡小学校合唱部が『金賞』を受賞いたしました。全国から三十二校が出場し、十一校が金賞に輝いた全国大会。課題曲「雪の窓辺で」自由曲「生きてる地球」を合唱し、一昨年度に続く二度目の金賞受賞となりました。

創部四十年の歴史を持つ楯岡小学校合唱部。今年度の部員は、三年生から六年生までの四十一名。新型コロナウイルス感染症防止対策のため、マスクをして短時間での練習を続けてきました。昨年度は、コンクールが全て中止になりました。みんなで集い歌えることがどんなに幸せなことなのか分かった一年でもありました。私たちの活動を支え、応援してくださいました全ての皆

様に心より感謝申し上げます。  
(合唱部担当教諭 戸津和美)



楽しんだ全国大会

## 注目!

### 書道家 笹原 美楓 さん

「書道は大人になってからするから、今はバレーをさせて！」高校生の私はそう母と約束しました。

約束を果たさねばと書道を始めたのが三十八歳の時、道具は夫のものを借りて……。義母の見守る中、コタツに座り書いたことを思い出します。数年後、県の書道展に初入

選した際、「なんと一番下手なのは自分の作品」と愕然としました。これではダメだと自分に言い聞かせ、どうした

らしい作品に仕上がるか研究を重ね、今もその途上にあります。

この度、県知事賞をいただきましたが、会場で感じたことは、「まだまだだな」の一言。ただ審査員の方から認めただけだったことは、今後の作品制作の大きな励みになります。

新型コロナウイルスなどと慌ただし中であるからこそ、心を落ち着かせ、半紙に向かえる時間がとても有意義に思えます。

### ◆プロフィール

村山市書道会副会長  
樺墨書院東原書会代表  
【受賞歴】平成二十七年改組二  
回目展入選、令和三年山形県  
総合書道展県知事賞 など



地域の子どもたちと

## 令和三年度 村山市芸文協のつぎ

- 4・16 会計監査
- 4・23 理事会
- 4・30 三役幹事会
- 5・14 総会
- 5・22 山形交響楽団 ユアタウンコンサート村山公演（後援）
- 5・25 県芸文協会総会（書面）
- 7・28 市町村芸術文化総合団体会長会議
- 9・20 fox capture plan 10th Anniversary Live（後援）
- 9・24 芸術文化功労者選考委員会・三役幹事会
- 10・8 芸術祭展示部門合同会議
- 10・15 村山市芸術祭開幕式・功労者表彰式
- 10・20 県美展こども県展村山巡回展
- 10・31 「組踊」特別鑑賞会（後援）
- 12・7 芸文だより編集委員会
- 1・24 芸文だより編集委員会
- 2・15 三役幹事会

## あとがき

新型コロナウイルスの感染拡大で、今年度の芸術祭は開催できるだろうか？と、心配されました。でも、多くの芸文協団体が参加し、「第五十七回村山市芸術祭」は盛大に開催されました。コロナ禍の辛い・苦しい中でも芸術によって、人の心は癒され、明日への夢と希望が湧いてきます。

今回の芸術祭は、多くの市民と喜びを共有でき、「芸術の秋」に相応しい素晴らしい祭典になったと思います。これからも皆様のあたたかいご支援をお願いいたします。（編集委員長 田中 正信）

### 芸文だより編集委員

- 田中 正信  
(松舞踊村山塾)
- 小山 孝子  
(村山市社会音楽連盟)
- 青木 勝一  
(村山市書道会)
- 早坂 修  
(杉島諏訪太鼓保存会)
- 倉金 徳嗣  
(村山エッセイクラブ)